

平成30年度 附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

竹口佳昭

(キーワード：附属小学校・附属中学校 教育相談室 スクールカウンセラー実習 スクールカウンセラーだより スクールカウンセラーによる授業 全員面接)

1. はじめに

鳴門教育大学（以下、本学）の附属学校園では、附属小学校・附属中学校を中心として「教育相談室」が運営されている。

平成13年度から、附属学校園には本学の臨床心理士の資格をもっている教員がスクールカウンセラーとして配置された。平成27年度からは生徒指導支援センターの設置に伴い、生徒指導支援センター研究員の筆者が附属小学校・附属中学校の専属のスクールカウンセラーとして配置された。

本報告では、平成27年度・平成28年度・平成29年度の報告と同様に、平成30年度の「教育相談室」活動を、附属小学校・附属中学校におけるスクールカウンセラーの活動、スクールカウンセラー実習、スクールカウンセラーだより、スクールカウンセラーによる授業、全員面接の5点から報告する。

2. スクールカウンセラーの活動

(1) 活動形態

筆者が附属小学校には金曜日・附属中学校には水曜日に、週1回10時から17時までの6時間、スクールカウンセラーとして教育相談活動に携わった。

スクールカウンセラーの活動は、附属小学校・附属中学校とも教育相談室で行った。

(2) 活動回数、相談人数、相談件数、相談内容

活動回数は、附属小学校・附属中学校ともに40回であった。

平成30年度のスクールカウンセラーの相談人数、相談回数は表1・表2の通りである。

表1 平成30年度の附属小学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
児童	15名	31回
保護者	11名	41回
教職員	17名	107回
計	43名	179回

* 家庭訪問 5回

表2 平成30年度の附属中学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
生徒	9名	73回
保護者	14名	47回
教職員	16名	45回
計	39名	165回

* 家庭訪問 5回

1) 附属小学校での相談について

附属小学校の相談人数は、全体で43名であった。内訳は児童が15名、保護者が11名、教職員が17名であった。昼休みや放課後に遊びに来室した児童は、110人で延べ373人であった。

相談回数は、延べ179回であった。このうち児童が31回、保護者が41回、教職員が107回であった。なお、養護教諭とは毎回打ち合わせの時間をとっているため、このデータには含まれていない(表1)。

児童の相談件数は15件で、相談内容は友人関係・いじめについての相談が各6件で、学習や進路についての相談が2件、家族についての相談が1件であった。

保護者からの相談は11件で、相談内容は子育てについての相談が5件と最も多く、不登校・家族についての相談が各2件、いじめ・発達についての相談が各1件であった。

不登校児童の家庭訪問を5回行った。

2) 附属中学校での相談について

附属中学校の相談人数は、全体で39名であった。内訳は生徒が9名、保護者が14名、教職員16名であった。

相談回数は、延べ165回であった。この中で生徒は73回、保護者が47回、教職員が45回であった。なお、養護教諭とは附属小学校同様毎回打ち合わせの時間をとっているため、このデータには含まれていない(表2)。

生徒の相談件数は9件で、相談内容は友人関係についての相談が7件と最も多く、不登校・家族についての相談が各1件であった。

保護者の相談件数は14件で、相談内容は家族についての相談が5件と最も多く、不登校についての相談が3件、発達・子育てについての相談が各2件、SNS・いじめについての相談が各1件であった。

不登校生徒の家庭訪問を5回行った。

(3) 活動内容

附属小学校は、児童・保護者との個別面接、教員へのコンサルテーション、昼休みや放課後の児童とのプレイ、授業中の行動観察、個別学習支援、給食時間の昼食参加、5年生との全員面接、家庭訪問を行った。

附属中学校は、生徒・保護者との個別面談、教員へのコンサルテーション、「いじめ」の授業、1年生との全員面接、家庭訪問を行った。

3. スクールカウンセラー実習

本学臨床心理士養成コースの実習の一つとして、スクールカウンセラー実習がある。平成27年度から附属学校園でもスクールカウンセラー実習の受け入れを開始した。3年目までは、附属小学校・附属中学校とも各2名の実習を行った。4年目の平成30年度は、附属中学校で4名、附属小学校で2名が実習を行った。

附属小学校の2名は、スクールカウンセラーの面接に陪席をして記録をとり、内容について検討した。昼休みや放課後には児童とゲーム等を一緒に楽しみ、児童とのこころの交流の回り方を学んだ。授業参観を行い、相談室と教室での様子の違いを観察した。

附属中学校の4名は、前期(4月～9月)と後期(10月～2月)に2名ずつ実習を行った。附属中学校でも附属小学校同様スクールカウンセラーの面接に陪席をして記録をとり、内容について検討した。様々な悩みを抱えて教育相談室を来室した生徒とゲームや会話を通してこころの交流の回り方を学んだ。家庭訪問にも同行し、不登校生徒や保護者との関わり方を学んだ。

どちらの学校の実習生も、空き時間には教員の職務内容やスクールカウンセラーとしての心構え、面接の振り返り等を行った。毎回、実習ノートにケース記録や実習の感想を記入し、筆者がコメントした。

ある実習生は、「学校で働けることを楽しみにしています。先生方とのコンサルテーション、面接の陪席や授業を見学できたことがとても勉強になりました。」と実習ノートに記入していた。直接、学校の文化に触れることができたことや面接に陪席したことは、今後実践していくうえで院生にとっては大きな糧である。

4. スクールカウンセラーだより

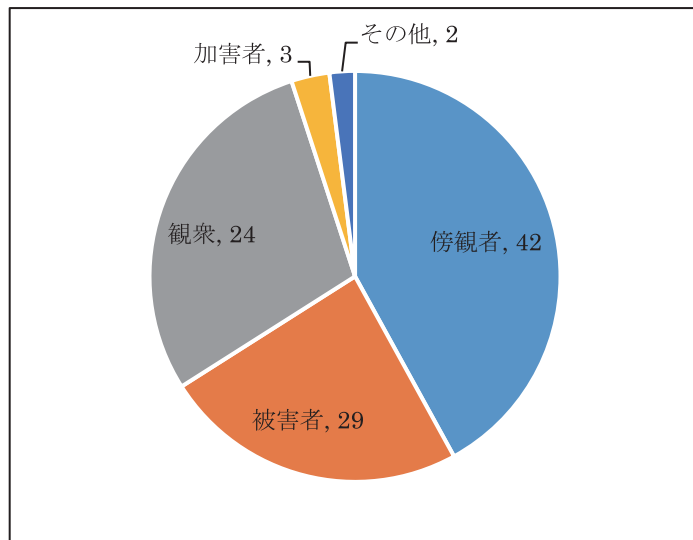
スクールカウンセラーだより『こころこころ』(巻末資料)を毎月1回、8月を除き計11回発行し、児童・生徒に配布した。これはスクールカウンセラーの活動や勤務日を保護者や児童・生徒に周知すること、児童期・

思春期のこころの動きや他人との関わり方等を紹介することで、スクールカウンセラーに興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

5. スクールカウンセラーによる授業

五十嵐かおる原作の「いじめ」という漫画 {女子陸上部の日富部長（加害者）が陸上部員の実咲（被害者）をいじめるという設定。登場人物は、実咲の友だちの優花とまあちゃん（傍観者）・陸上部員（観衆）・晴海先輩} を筆者が教材化し、附属中学校の2年生4クラスで授業を行った。

様々な立場の生徒が抱える苦悩を理解した上で、いじめを解決するにはどの立場の生徒がどのように行動すればいいかについて考えた（図1）。



（図1） どの立場がいじめを解決する

〈解決すべき立場と意見の一部〉

（傍観者：42%）

- ・優花とまあちゃん（傍観者）が、罪悪感を持っている陸上部員（観衆）と手を組んで、たくさんの人を味方につけて日富部長（加害者）へアタックする。
- ・優花とまあちゃん（傍観者）が、自分たちもいじめられてしまうかもしれないという覚悟を持って、先生に相談する。
- ・優花とまあちゃん（傍観者）が、録音や撮影をして部長より強い人や先生に見せる。

（被害者：29%）

- ・実咲（被害者）が晴海先輩に相談し、晴海先輩が日富部長（加害者）に何かやってくれていじめはなくなる。
- ・実咲（被害者）が今よりもっと頑張って、さりげなく周りの大人に言う。頼れる人を見つければ一人でも苦しまずにすむ。
- ・実咲（被害者）が転校する。

（観衆：24%）

- ・陸上部員（観衆）が、日富部長（加害者）にしていることは悪すぎないかと、団体になって言う。
- ・日富部長（加害者）一人では実咲（被害者）をいじめることはできないから、陸上部員（観衆）が実咲の味方になることで、日富部長は実咲をいじめることが難しくなる。
- ・陸上部員（観衆）が、日富部長（加害者）が悪いような雰囲気にし向けていく。

（加害者：3%）

- ・日富部長（加害者）が、実咲（被害者）の実力を認め県大会で好成績が取められるように応援する。
- ・日富部長（加害者）が、自分がしてきた行動を見直し反省する。

(その他：2%)

・いじめなんて解決できるならずっと前に解決している。意図も法則もないものを解決できるとは思わない。

〈生徒の感想〉

・今日はいじめについて改めて考えることができました。正直、私はいじめに触れたことがないので考えづらい部分もありました。もし、自分が被害者になったら、まずは誰かに相談したいと思います。

・「チクる」のは悪いことではない。つらいことがあったらまず相談。自分の命が一番大事。

・附属の人って賢いし、勉強以外の能力もあってすごいし、笑っていることはできるけど、正直辛い。自分の好きなことに能力が発揮できるから正直イラっとする。自信があるように見せても、全然自分は自信なんかない。

・いじめのことを今回考えてきたが、やはり一番大切なのは命だとよくわかった。

・実際、もし同じようなことがあった時、私は本当にいじめられている人を助けるために何ができるかを考えるきっかけとなった。

・結局いじめはなくならないだろうなあと。正直理由なんてろくにないのに、いじめられたりハブられたりなんて当たり前。

〈考察〉

いじめを解決できる立場としては、傍観者が42%で最も多かった。これは、いじめを解決するために傍観者が行動すると、いじめが解決に向かう可能性が高くなることが理解できたからである。しかし、傍観者以外の生徒が58%いた。筆者は、いじめに関係した多くの児童生徒（被害者・観衆・傍観者・加害者）から、いじめの状況について話を聴いた。その結果、被害者や観衆が解決できるのは、いじめの早期の段階であると考えられる。加害者の味方が減ることによるパワーバランスの崩れ、被害者の深い悲しみや絶望感や無力感、観衆の心理などについてももっと掘り下げる必要がある。

「いじめなんて解決できるならずっと前に解決している。意図も法則もないものを解決できるとは思わない。」
「結局いじめはなくならないだろうなあと。正直理由なんてろくにないのに、いじめられたりハブられたりなんて当たり前。」と感想に書いた生徒がいた。彼らは、いじめの経験があり、そのいじめは解決に至らず、今も深い心の傷となり、うずいているのであろう。このような生徒を救うためにカウンセリングの有効性を訴えていくことが大切である。

6. 全員面接

全員面接の目的は、児童生徒が相談室やスクールカウンセラーの存在を身近に感じるためである。

附属小学校5年生と、附属中学校1年生に全員面接を行った。

附属小学校では、昼休みと掃除の時間に5分ずつ1日に6人ずつ面接を行い、附属中学校では、昼休みに2人、放課後15人の面接を1日に5分ずつ行った。

できるだけ早く解決するために担任の先生や学年の先生と情報交換を行い、解決に向けてチーム学校として取り組んだ。

7. 成果と今後の課題

上記の活動を通して感じた平成30年度のスクールカウンセラー活動の成果と課題について述べる。

(1) 成果

① 附属小学校・附属中学校の不登校児童生徒は、全国平均の1.5%（文部科学省2018）に比べて下回る。不登校の児童生徒や保護者のところに寄り添うことで、不登校の児童生徒や保護者は今の状況についてじっくり考えたり、新しい気づきに出会うことができた。

② 教員は、筆者とのコンサルテーションを通して、今後の指導の方向性について一緒に検討することで、新たな視点で児童生徒に接し、問題を未然に防ぐことができた。

③ 附属小学校では、たくさんの児童が昼休みや放課後に相談室を訪れ、スクールカウンセラーやスクールカウンセラー実習生とゲームをしたりたわいもない話をしたりすることで、顔が少し明るくなって教室に戻った。これらの児童生徒のエンパワメントに貢献した。

④ 麻生（2007）は、「いじめが顕在化してから『いじめ』の授業をするのは、たいへんむずかしい」と述べて

いる。いじめを未然に防ぎ、いじめを深刻化させないためにも、いじめについてクラスで話し合うことはとても大切である。いじめの授業から生徒との心理的距離が縮まり、授業の後で人間関係について相談に訪れる生徒もいて、いじめ予防の一助になった。

- ⑤ 曾我部（2017）は、「スクールカウンセラーの役割として、児童生徒、保護者、教職員への啓発活動があり、教育相談室だよりはその役割を果たすのに役立っている」と述べている。先生方の中には、終わりの会で『こころころころ』を読んで、児童生徒とこころの共有を図る先生方もいた。また、保護者から運動会等の行事で「教育相談室だより『こころころころ』が楽しみです。こころについて考えさせてくれますよね。」「子どもと一緒に『こころころころ』読んでますよ。」等の声があった。相談室やスクールカウンセラーに関心を持つ保護者が増えた。
- ⑥ 青木ら（2018）は、「全員面接は、面接したスクールカウンセラーから見ると問題が起きる前に学校不適応の萌芽の早期発見に有益であった」と述べている。全員面接で人間関係や学習面等様々な悩みを打ち明ける児童や生徒がいたことから、学校不適応を未然に防ぐことにつながった。

(2) 課題

全員面接で出てきた相談に応じるために、全員面接の日程を数回延期した。そのため、小学校では全員面接の日程が確保できず、次年度に繰り越した。もう少し余裕のある全員面接計画を立てたい。さらに、話し足りないという児童生徒がいたので、一人あたりの面接時間も増やしたい。

石川（2019）は、「スクールカウンセラーは学校に定期的に勤務しており、いじめの未然防止や早期対応に寄与することが可能である」と述べている。全員面接だけでなく、相談室に来室している児童生徒の授業観察等から児童生徒の心の動きを細かく把握して、今まで以上に児童生徒の成長のために学級担任や養護教諭等と緊密に連携していきたい。

引用文献

青木真理・金成美恵・野地恵美子・相模由紀・澤藤晃治・大越一也・川本和久 平成28年度 附属中学校「教育相談室」活動報告 福島大学総合教育研究センター紀要第24号 2018 pp. 63-70

麻生信子 いじめの解決 日本標準 2007 pp. 41

石川悦子 学校のいじめ防止活動におけるスクールカウンセラーの役割 子ども教育宝仙大学紀要10 2019 pp. 1- 8

文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成29年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（速報値）について 2018 pp. 70

曾我部和弘 児童生徒理解のための「教育相談室だより」（1）：スクールカウンセラーとして伝えること 白百合女子大学研究紀要第53号 2017 pp. 73-91

こころこころこころ

2018, 4, 11 (水)
附属小学校 スクールカウンセラー通信
竹口 佳昭

楽しんで乗り越えよう！

ご入学、ご進級おめでとうございます。

『新しい担任の先生はどんな先生かなあ。自分のいろんな気持ちをわかってくれる先生かなあ。知っている友達はあるかなあ。早く、新しい友達ができればいいのになあ。できるかなあ。』などと、期待と不安を胸に膨らませ、新学期を迎えたことと思います。

『新たな気持ちで、今年1年頑張るぞ！』という気持ちが大きく膨らむと、いいですね。

私たちは、学校生活を過ごしていると様々な予期しない出来事（壁）に遭遇します。そのような壁に対応していく必要があります。

それらの壁を乗り越えるには様々な方法があります。

まず、正面からその壁を乗り越える方法です。

次に、正面ではないところから壁を乗り越える方法です。例えば、万里の長城の壁には、高い箇所と低い箇所があります。その低い箇所から乗り越えるのです。低い箇所なら乗り越えることができる可能性が高くなります。その低い箇所でも乗り越えにくい時には、はしごを持ってきて乗り越えるのもあります。

さらには、いったん立ち止まってみるのも1つの方法です。壁が崩れるのを待つ、あるいは壁を乗り越える力がつくまで、時間をおくのです。

どのような方法で壁に向き合う時でも、楽しんで壁に向き合えるといいですね。壁に向き合う時の気持ちは、自分で決められますから。苦しいと思えば苦しいですし、楽しいと思えば楽しくなります。

どうしても、壁の乗り越え方がわからない時には、家族や先生や友だちに相談しましょう。一緒に考えてくれたり、違った視点からのアドバイスが頂けるかもしれません。それらの人たちに相談しにくい時には、スクールカウンセラーに相談するのも1つの方法です。とにかく、自分で解決できることは自分で解決し、自分で解決が困難な時には、誰かに相談することがとても大切です。

誰かに相談することで、自分の気づいていなかった本当の自分の思いに気づいたり、もやもやしていた考えがまとまったり、新たな視点に気づくこともあります。新たな道がはっきり見えてくるのです。そして相談した人と一緒に歩むことができます。一人で歩むより、ずっと心強いものです。

人は一人では生きていけません。それなら、一緒に助け合いながら歩む方が、楽しいのではないのでしょうか。



4月来校予定

16日(月) ・ 20日(金) ・ 27日(金) 10:00~17:00

2018 Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School “Educational Counseling Office” activity report

TAKEGUCHI Yoshiaki

School counselor activities have been carried out at Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School Attached to Naruto University of Education since AY2001. From AY2015, school counselors have been dispatched from the Center for School Support of Guidance and Counseling. This report covers counseling activities in 2018 from 5 points of view, counselor activity content, school counselor training, school counselor news, school counselor course and interview for every student.